



『危険を感じる力』……危機回避能力の育成

校長 小 西 信 輝

今年度、4月、5月と子どもが乗った自転車と乗用車との接触事故や車道への飛び出しによる事故などが続きました。幸い大きなけがにはつながりませんでしたが、これらの事故は一つ間違えれば命を落としかねないものでした。

校区には、交通量の大変多い環状1号や国道39号、他にもJR石北本線線路や踏切、牛朱別川や農業用水路もあり、子どもにとっての「危険箇所」がいっぱいです。

しかし、私たちは、そういった道路や、線路、川のある環境の中で生活をしています。便利な道具である自動車や自転車も、様々な交通機関や河川も、現在の生活から切り離すことはできません。ですから、そこに住む人私たち一人一人がいつも危険について意識していなければ、事故に遭遇する確率が高まってしまいます。子どもたちも同じです。

学校では、日常の各担任による指導、登下校時の指導、放課後の巡視などを行っていますし、PTA生活部やボランティアの皆様による街頭指導、地域の皆様による青パトの巡回や見守り運動も行っていただいております。それでも心配は尽きません。



6月の全校集会では、『危険を感じる力』の大切さについて話をしました。校内や校門付近、学校近辺の交差点に潜む危険、また、どんな事故が多いか、起きやすい時間帯はいつか、その原因などについて考える機会をもちました。

北海道警察の統計から、①小学生の交通事故は、出会い頭の事故が7割以上を占めていること。②そのほとんどが「一時停止」や「安全確認」をしなかったことに起因すること。③「6・7月の事故が特に多い」、「朝と夕方の事故がほとんどである」ことなどを写真やグラフから教え、考えさせました。

子どもの頃から、「危険を感じ回避できる力」を育てることが事故の未然防止につながります。どんなところにどんな危険があるか想像できる力、直感的に雰囲気や肌で危険を感じる力を育てることが必要です。そのためには、実際の場所で確かめたり、回避の仕方を教えたりと、様々な機会を設けなければなりません。

学校で行う「ダミー実験」や「自転車教室」も大事な機会です。さらに大切なのは、各ご家庭が子どもの生活圏を考えて行う具体的な危険箇所の確認、自転車の乗り方への指導です。危険への意識が定着していない低学年の子どもだけでなく、高学年でも慣れた道での油断が大きな事故につながることもあります。

各ご家庭では、外に出る機会の多い夏休みを機会に、身の回りの危険について考える機会をもっていただきたいと思います。子どもが「危険を回避する力」を身に付けるためには、「これで終わり」ということではなく、大人がいつも危険を意識していくことが必要です。

7月24日で1学期が終わります。この間、各ご家庭、地域の皆様には、本校の教育活動や子どもの安全にかかわる各種の活動への温かいご理解とご協力をいただき、感謝とお礼を申し上げます。今後も、子どもたちのがんばっている様子、反対に課題となっている様子がありましたらお知らせください。みんなで「南っ子」を育てていきましょう。

また、「夏休み」には、子どもたちが家事を担うなど家族の一員としての役割を果たせるような取組、地域行事への積極的な参加、自由研究や補充学習など長い休みだからこそできる取組など、有意義な体験ができる25日間にしていいただければと思います。



